



はあひるにくす

大阪工業大学中央図書館

〒535 大阪市旭区大宮5-16-1

☎ 06-952-3131

君って何？

— 自我同一性について思うこと —

二橋 茂 樹

(工大・一般教育科・助教授(心理学))

人間には、自己をどこまでも実現させて行こう、持って生まれた可能性を実現化して自分のものにして行こうという動きがある。しかしそれが何なのか漠然としている。

若者は自問する。「自分とは何か」「自分は何のために生きているのか」「自分が本当に欲する仕事は何か」と。心の底に混沌とした自己の動きを感じとるが、未だ明確な形にならない。そして何をどう生きていけばよいのかわからないまま、不安と重圧感の中で、ある予感に導かれて暗闇の中を手探りで進んで行く。

井上靖に「北の海」(新潮文庫)という小説がある。主人公は昭和の初期、旧制の中学校を卒業した後、勉強もせず野放図に暮らしながら、毎日母校の柔道場にだけは通うという浪人生活の中で、ある時蓮見という金沢の旧制四高の学生に出会う。四高柔道部の話をきき、求めているものがあるように思い、夏の合宿に参加し、共鳴し、四高に進学しようと決心する。くめさんという老人が主人公に語るくだりがある。「わしは思うんだが、人間という奴は、一生のうちに何かに夢中にならんと。何でもいから夢中になるのが、どう

も、人間の生き方の中で一番いいようだ」。作者自身も述べている。

「日本海の荒海に面した金沢での三年間の高校時代、私はひたすら柔道に専念した。柔道の他は眠気と食い気だけの三年間というものを一生の間に持ったことは、途方もないようでもあるが、私の後半の人生の基礎を作ったといえることもたしかである」。

中野孝次「麦熟るる日に」(河出文庫)という小説がある。教育など必要でないという宮大工の息子に生まれた主人公は、旧制中学進学が許されず、小学校高等科2年(14才)で終らざるを得なかった。その時主人公は、「おれは一体どうなるんだろう、何者になるんだろう、とぼくは絶えずそのことが気にかかって、それを思うたびに漠然とした不安にとらえられた…」という状態にあった。その後、主人公は、跡を継いで欲しいという親の期待を裏切り、一人重い暗闇を漕ぐ思いで頑張り、中学の検定試験に合格し、ついに旧制五高(熊本)に入学する。しかし時期は第二次世界大



戦の末期で、何時出征するか分からず、出征すれば生きて帰れないというぎりぎりの状況の中で、人間が生きるということはどういうことか、それを掴みとりたいと必死にもがく。そしてついに入隊の通知がくる。自己実現半ばにして、の恨みを残す。

三田誠広「僕って何」(河出文庫)。昭和44年頃の学園紛争の中の一青年が主人公である。別に主義主張もなく成行きで学生運動のある派に入るが裏切り、またある女子学生と同棲するが、これも何となく成行きでそうしているという感じである。しかし一貫して「僕って何」と問いかけが続いている。未だ掴みかめていないが。

三人の主人公の自己実現のあり方を紹介したが、人間は時代を生きるものだと痛感する。それでは、現代の若者気質って何だろう。若者は、何ごとも程々にして、自分を賭けることを避け、本当にしたいことは別にあるという態度をとるといわれる。そうすることで傷つくことを避けスマートに生きる。しかし根なし草的な不安と空しさがつきまとうようだし、生甲斐がえられないようである。本当にしたいことが本人にもはっきりしないままあいまいにしているところに、実は深刻な問題が隠されているのではないか。「僕って何」の主人公には、多少このような傾向がみられる。

このような若者気質が問題にされるようになった頃、「自我同一性」ego identity という言葉が使われ出した。この概念が、若者の心理と行動を理解する上でぴったりと合うからである。

自我同一性とは、過去・現在・未来を通じて「自分は自分である」という存在の連続性、不変性の主体的自覚をもち、しかも自分は所属している社会に役割をもち承認されているという実感をもつことである。めまぐるしく変化する多様な現代の社会に対応するためには、自我同一性の確立があって始めて柔軟に対応できるのである。

始めにあげた若者の「自分とは何か」など

の自問や小説の主人公が追い求めていたものは、実は自我同一性の確立にはほかならないといえよう。若者が自己の可能性を十分に実現しようとするとき、この「自分」の主人公は他ならぬ自分自身であると自覚し、自分固有の価値を見出そうとする。「何故勉強しなければならないのか」「生きる意味は」「この私にとってできることは何か」など疑問を抱き、自分で満足のいく答えを見つけようとする。これが価値の自己発見である。これが生甲斐につながる。人生は安易でない。

自我同一性の確立の難易は人によって異なる。ある一群の人は迷いや危機なしにすんなりと同一性を確立し落ち着いていく。親の期待や社会の価値観を葛藤なしに素直に受け入れ順応していける。しかし中には、自問せず順応しすぎた為に20歳後半や30歳代になってやり直しをしなければならない人(職場恐怖や脱サラ)もいる。その際は学生時代と比べて状況は厳しい。ある群の人は混乱し、内的不安や挫折の苦しみなどの波乱の末、同一性の確立に至る。またある人たちは混乱や困惑の真只中にいて、渦をなかなか乗り切れないでいる。「何もやる気になれない、憂うつで自信がない」とか「何をしたいかどうしたらよいか分からない」と立往生し、同一性の確立は青年期で終らないこともある。

青年期には、一過性の悩みから対人恐怖症、無気力による留年・憂うつ症・自殺や分裂病など多彩な問題が起こる。その際大切なことは、人に相談したところでどうせ同じことだ、と自分の殻に閉じこもろうとせず、友達や教師に相談することである。人生は一人で渡るには余りに辛いし危険だ。お互いに支え助け合っていこう。カウンセリングというものがある。これは心の中の葛藤や外的な出来事や人とのからみ合いの中で、人生航路に迷ったり立往生したとき、本来の航路に進めるよう援助する方法である。

□シリーズ□ ～歴代館長が語る～

私の館長時代 (S46.4.1~48.3.31)

図書館長時代の思い出 — 机上の洋菓子 —

福島 正人

(4代館長・工大・建築学科・教授)

青井忠正先生に呼び出されて、「図書館長をやれ」と命じられた。ついうっかりして、引受けざるを得ない羽目に陥ってしまった。当時、青井先生はまだ学長事務取扱だったように思うので、いわゆる大学紛争が、何んとか収拾した直後のことであつたろう。もう12年ほども前のことである。

近頃は焼酎惚(ぼ)けに加えて、多少の耄碌(もうろく)気味、一時流行った「記憶にございません」といいたくなることが多い。それかあらぬか、館長時代の記憶で、「ばびろにくす」の記載に値するようなのは、残念ながら何一つない。ということは、館長として「およそ何もしなかった」からであろう。僅か任期2年で館長を辞めることは、すんなり許可された。「長と名のつくものは、その任にあらず」と、自他共に認め、認められた結果であろう。歴代の館長の中で、「およそ何もしなかった」館長として後世?に名が残されることになるのかもしれない。

当時は、図書館の事務室の一隅に、衝立ようのもので仕切られた館長室があつた。今の6号館の2階だか、3階だかである。館長室に古い木製の机と椅子があつた。当時、私の研究室にあつた机・椅子より、はるかに上等のもののように思われた。そのほかに何があつたのか、今は全く記憶がない。

今にして思えば、その机の上には、しかるべき花瓶なども置かれて、その折々の花など、活けて下さっていたらうに、その記憶すらない。当時は、それに気づかぬほど無粋だったのかもしれない。

館長室に初めて出向いて驚いたのは、「お八つ」である。私の大人になってからの経験で

は、建築の現場以外に「お八つ」の習慣はなかったからである。しかも、その「お八つ」なるものが、多くは洋菓子であつた。およそ洋菓子などというものは、鹿児島



の芋焼酎でその半生を育てられたような私には、性が合わないのである。落語にある「饅頭こわい」の二倍も三倍も性が合わないのである。

といつても、折角用意されたものを、食べないものは悪かろうと、無理矢理口に押し込んで吞みこんだ。難行苦行であつた。館長室には、日を決めて週2回ほど出向いていたように思うが、出向く度に、洋菓子は次第に大きくなるように思われてならなかつた。

思い余つて、何度か行くえをくらましてみた。「お八つ」の時刻をはずして、館長室に帰ると、机の真ん中には、一皿の洋菓子だけが残されていた。

もうすぐ中秋の名月だが、私の句に「無月とて一壺の酒のあればよし」というのがある。この句を口にすると、なぜか「机上の洋菓子」が脳裏に浮ぶ。その洋菓子は化け物のように大きい。

(昭和58年9月7日)



図書館活用の手引き

② レファレンス・サービス とはなにか

問題解決にあたって、図書館を利用すればよいというのは当然のことですが、それはなぜでしょうか。通常私たちが解答を求めようとする時は、本や雑誌といったものにその答を求めます。当然、そういった自分の興味・関心の高い分野については、個人の蔵書として必要なものを買っていると思います。しかし、情報氾濫のこの時代に、取捨選択したとしても個人でそれを保有するには、あまりにも情報が多すぎます。そこで、図書館の利用ということになるわけです。

さて、それではレファレンス・サービスとはいったい何でしょうか。それは、利用者が実際に、ある疑問にぶつかった時、それをどこへ問い合わせたらよいか、何を調べたらよいか、といったことに対して解答するサービスのことです。山を例にとって説明しますと、ひとつの山に登るにも、頂上をめざすルートはいろいろあるはずで、ルートによっては、

体力や登山技術に応じて必要な装備をととのえなければ、危険で登れないこともあります。それと同じように、文献あるいは情報を求める場合にも解答を求めるためのルートは専門事典・百科事典・年鑑・目録などさまざまであり、利用する道具としての文献と検索技術との組み合わせによって、いろいろな方法をとることができます。

ここでは、本学大学歌の作曲者、信時潔(のぶとき・きよし)氏を例に挙げて説明します。質問内容は「氏の略歴などが知りたい」とします。参考係は①人名事典②音楽関係の事典③百科事典などがあると判断し、文献を調べます。ありました! ③の「世界大百科事典」です。こんな具合にレファレンスを行い、解答を利用者に提供するのです。

今回は「レファレンス・サービス」について書いてみました。

編集後記

○「私の館長時代」は建築学科の福島先生にお願いしました。

○焼酎と洋菓子。振り返ってみると福島館長時代は、大学紛争といった一連の時代背景の中に、全国の大学が混乱を極めた時で、学報を繰ってみると、当時、冷暖房装置が館内に設置され学生から好評を博したことや、また在任中に執筆された「しろありと住居」が図書館協会指定図書に選定されたとの記事があり、先生の幅広いご活躍の一端をみることができます。

○ともあれ、人生甘辛模様。人は急ぐために生まれてきたのではありません。しみじみ、秋を想う余裕をもちたいものです。

○二橋先生には、学生の悩みについて記事をお願いしました。

先生は、心理学がご専門で、本学ではカウンセラーとしてもご活躍中です。ちなみに学生相談への案内は、次のようになっています。

相談日時：毎週火曜日 16時～19時
場所：学生相談室（学生課内）

どんな相談にも気軽に応じていただけたことなので勇気を出して話しかけてみましょう。先生は心のレファレンス・サービスを諸君に提供されるでしょう。

文中の図書が図書館にあるので紹介しておきます。「北の海」分類913.6 I、「僕って何」分類913.6 M、いずれも第1図書室です